



episode 10 母親の私をウキウキさせた絵本

投稿者 かずえ さま(福岡県)

『きょうは なんのひ?』
 瀬田貞二 作
 林 明子 絵
 福音館書店 1979年



今でも鮮明に覚えている、私個人の昔話です。

あの頃、我が家には数々のルールがあって、なかでも、

子どものテレビ視聴は一週間に1時間30分まで、コミック(漫画本)禁止は、他の家庭ではあまりみられない決まりごとだったと思います。

家族共通の娯楽は、読書でした。子どもが小学校中学年くらいまでの週末は、市立図書館に家族で通っていたので、図書館員さんとは顔見知りで、子どもも名で呼んでもらっていました。

あるとき、図書館で見つけた『きょうは なんのひ?』には、私たちの暮らしの原風景が描かれていました。

炭鉱閉山後に残されたままの炭鉱長屋住まいから、団地に移ったときでもあったから、そう感じたのかもかもしれません。

その絵本は、母親の私をウキウキさせ、その年のクリスマスは、『きょうは なんのひ?』作戦を行いました。3人の子どもたちが、みんな小学生のときのことです。

誕生日とクリスマスのプレゼントは、小さなころは絵本を、小学生になると読みものを、子どもたちの心の財産として贈っていました。だから、クリスマスプレゼントは絵本です。

でも、渡し方を変えると、いつもと違うクリスマスが訪れたのです。

イヴの夜、子どもたちの靴下の中に、こっそり入れるのは、家にあるモノの名前を書いた紙切れ一枚です。

翌朝は案の定、ワァワァ、ガチャガチャ、ドタバタと、それはそれは賑やかで、ゲーム感覚に興じる子どもたちを横目でみて、ほくそ笑んだものです。

3人それぞれを思って絵本を選ぶことと同じくらいに、

宝探しゲームを作るのも、探す子どもを眺めるのも、楽しみのひとつでした。

子どもが小学生の間は、誕生日もクリスマスも、宝探しは続きました。

私たち夫婦が歳を重ねるとともに大人になった子どもたちの家庭でも、

『「きょうは なんのひ?」クリスマス』が行われていたようです。

そのうちに、孫が親世代となった家庭でも、そのまた子孫の家庭でも、同じ光景が見られるのかなあと考えるだけで、気分はあの頃に戻ります。我が家にとっての絵本は、お話の楽しみに加えて、親子のスキンシップ遊びです。

そして、何を語らずとも受け継がれている「絵本の楽しみ方」にニッコリしています。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2017」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



11月30日は「絵本の日」!

『きょうは なんのひ?』の作者は、誰もが知っている『指輪物語』を代表とする外国ファンタジーの翻訳や、国内外の昔話の再話を中心とした子どもの本づくりに生涯をかけた瀬田貞二氏です。また日本の子どもの本の流れをはじめ整理しまとめた、日本児童文学評論家の草分けでもあります。

私たち医療法人元気が湧くが、日本記念日協会に登録して制定した「絵本の日」の由来とさせていただいた偉人なのです。すなわち、日本で、はじめて瀬田氏が取り組んだ、日本の子どもの本を評論した『絵本論』が発行された1985年11月30日にちなんで、11月30日を「絵本の日」としたのです。制定して11年、「絵本の日」は、出版業界だけでなく、一般社会にも確実に広がっています。

絵本の出版を見届けて…

わが国における絵本評論を切り拓いた瀬田氏の創作絵本は、多数の翻訳作品と昔話絵本のなかでは、貴重すぎて目を惹くのです。

そのひとつが、『きょうは なんのひ?』です。初版発行は1979年8月10日、瀬田氏が亡くなる僅か11日前でした。きっと、長年温めたお話を林明子氏のイラストによって完成させ、子どもたちの元に届けられて安堵したことでしょう。

発行当時の庶民生活が映し出された『きょうは なんのひ?』は、40年以上もの間、読み継がれ、平成、令和の時代でも子どもたちの心をぎゅっと掴んでいます。

瀬田貞二氏、児童出版 最初の仕事

絵本作家であり、児童文学翻訳家であり、絵本評論家でもある瀬田貞二氏の児童出版にまつわる最初の仕事は、児童百科事典の編集でした。

東大卒業後、夜間中学の国語の教師になりますが、徴兵されたのちの戦後、復職するも間もなく、学校教

育法が公布されます。アメリカの干渉による制約の多い、程度の低い内容になると考えた瀬田氏は、「教育は下のほうからでもできる」と教職を辞めるのです。

その後2年間、国立国会図書館が移っていた赤坂離宮に通って外国の児童書を読みこなします。このときに、コンプトンの『エンサイクロペディア』や『ブリタニカ・ジュニア百科事典』といった子ども向け百科事典に出会い、日本でも子どもの百科事典を作ろうという考えに行き当たったのです。

瀬田氏が目指したのは、今までの味気ない百科事典ではなく、「若い人たちが偶然めくったページに読みふけてしまうほどの、おもしろい百科事典」づくりであったと、『子どもの本の夜明け－瀬田貞二伝』に記されています。

こうして『児童百科事典』の企画を持って平凡社に入社した瀬田氏は、8年がかりで全24巻(1951～56年刊)を出版したのです。

いつの時代にも『絵本論』

平凡社を退社後の瀬田氏は、「自分流に子どもの本とつきあう暮らし」を始めました。1959年、自宅で家庭文庫を開き、同時に評論の執筆や多くの子どもの本の翻訳・再話、創作を手がけるのです。家庭文庫開設前の1956年から始めていた、福音館書店「こどものとも」月報における連載は、1975年まで続き、絵本の物語やイラストレーションのあり方から、テキスト論など多岐にわたって絵本の考察を執筆しました。

この連載が書籍化されたのが『絵本論』なのですが、実際に出版されたのは瀬田氏が亡くなった後の1985年です。それから38年経った今、『絵本論』を教本とするのは、特定の職種の、一定年齢層に減っています。瀬田氏の切り拓いた「日本の絵本の道」と「絵本論」を後世に語り継ぎ活かすのは、私たち専門職の使命です。

文献

- 1) 荒木田隆子：子どもの本の夜明け－瀬田貞二伝，福音館書店，東京，p.477, 2017.